

商学部における特色ある学部教育の補助「見学調査」 報告書

テーマ	超ハイテク大型総合物流センターの実態					
科目名	ベーシック演習Ⅰ・演習Ⅰ					
担当教員	山本 慎悟					
調査先	ヤマト運輸羽田クロノゲート					
調査日	2025年7月9日(水)					
参加学生数	1年生	14名	2年生	0名	3年生	5名
	4年生	0名				

19

調査の趣旨（目的）

ヤマトグループが運営する超ハイテク大型総合物流センターである「羽田クロノゲート」のスピード・付加価値機能の実態を探る。

調査結果

「ヤマトグループ」は、4台のトラックから事業をスタートさせた。当時、荷車・馬車・人力車・鉄道が一般的な荷物の運び方であった中で、創業者はトラックを使っの荷物輸送の時代が来ると確信していた。1921年には、日本初の路線事業を展開する。1950年代には、航空輸送・海上輸送・美術品の輸送等へ乗り出し、1957年に「黒猫マーク」を制定した。「黒猫マーク」には、親猫が子猫を運ぶように大切に荷物に運ぶという意味が込められている。1976年に、今では一般的となった「宅急便」のサービスをスタートさせ、現在は年間約23億個の荷物を扱うようにまで成長した。宅急便を届けた際にお客様が不在だった場合、不在便になるわけだが、不在便にはギザギザマークが付いており、これは目が不自由な人でも商品を判別できるようにと工夫されたユニバーサルデザインになっている。2007年には、「クロネコメンバーズ」という個人会員サービスを始め、現在では5600万もの人が加入している。2015年からは過疎地域へ路線バスの一部を借りて荷物を配送するサービスをスタートさせ、2030年までには全てのトラックをEVトラックに置き換えるという取り組みを始めている。また、2050年までにCO2排出量を実質0にするという目標を掲げ、温室効果ガスの排出量削減に向けた取り組みに力を入れている。

日本最大級の物流施設である「羽田クロノゲート」では、一時間に最大48000個の荷物を仕分けすることが出来、10トンの大型トラックに換算すると約75台分もの荷物となる。施設に着いた荷物はまず初めに、スキャナーで荷物の行先を読み取られ、クロスベルトソーダを通りシューターで仕分けされる。ほとんどの工程が機械によって行われており、問題が発生した時に備え、集中管理室では全体を把握する為に24個のモニターと24時間3交代制で全体のチェックが行われている。メンテナンス中は2つあるクロスベルトソーダの片方を交互に使い分けることで、物流が止まらない為の工夫が為されている。

「羽田クロノゲート」を運営するヤマトグループは宅急便以外のサービスも行っており、家電のメンテナンスサポートサービスや海外から届いた商品を客の元に届けるための通関業務を行うことでスピーディーな配送と人件費のコスト削減を可能としている。ヤマトグループはこのような

